

昭和三十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一回一頁發行）
昭和三十年四月二十五日印刷
昭和三十年四月一日發行

第二十一卷

四月號

淨土



四月號

新想

花は三日、月は三夜
その前後に雨あり、雲あり、
深く人生を味うべし

◎ 苦悩なくして人間なし、
人間なくして宗教なし。

◎ 満足は下り坂。
不満足の間が人生の花時。
常に満ちたれぬ幸福を
感謝すべし。(真溪淡骨)

浄土 四月號 目次

卷頭言	(1)
花の散るころ	吉田絃二郎(2)
花まつり—今と昔—	中村康隆(6)
白象平和を	新保義道(24)

小説 小納言信西一族	鶴田湛泉(28)
啄木の墓に詣でて	須藤隆仙(18)

印度ネパールの佛教	壬生台舜(14)
知恩院を訪ねて	大橋俊雄(20)

書評	(11)
浄土へのたより	(26)
芝園だより	(表三)
表紙	松濤達文



言 頭 卷

浮沈というと、何かしがない女性の一生のようだが、道德の世界もそうだ。妙な話だが戦中戦後を省りみてみると数々の徳目が浮沈みしている。もつとも中には、敗戦のおかげで、暗いかげにいがめられた徳目が、本来の姿に展開し、正しさをとりもどしたものも多い。

しかし、忘れられたようになってしまったものもある。その中で、ふしぎなのは節約という事だ。あれほど之が必要であり、各自が之なくしては生活できない状態でありつゝも、雑誌新聞の紙上には強調されなかつた。むしろ、こういった受身の消極的な道德は、自由自己を主張する積極性のかげに薄れていた。國自體としても負けた乏しい國でありつゝも、外國の高い品物をよして、國産でいく、なるべく自家製品で間に合わす、というふうではない。昨年邊から、讀賣で國産運動が叫れ出した位だ。

一粒の落した飯粒も、之は菩薩様だ、勿體ないと拾い上げるのと、非衛生だと除くのとの違い、即ち浮沈である。勿體ない、物も生き物だ、落さぬように生かさなければならぬ、と考える行方は決して消極的ではない。物を殺さずに生きるという事は不可能ではあるが、殺してはならない、殺さずにいく、無駄にしないでいく、生かすようにしようという心の支配によつて、人は、慈悲と愛の世界への足がかりを得る。古聖の水こし袋で水を呑んで、水中の虫を殺すまいとし、錫杖の響で、足下の虫を殺さずに進む思いやりを遠くいつも反省したい。



花の散るころ

吉田 絃二郎

花が散る。長い冬の間を待ちわびていて、やつと咲いたかと思つたばかりの花が散る。あわただしげに散る。

散る花をながめていると、十人が十人まで會者定離という感慨がわいて來るであらう。落花を見て無常觀を發せない者は、その人のところがたかぶりや俗念に麻痺しているからである。

しかし散つてゆく花自身としてはどんな心で散つてゆくのであらうか？

春の日を浴びつゝ散つてゆく花をながめていると、一つ一つの花びらはよろこび勇んで、小おどりして、風に吹かれて散つていへるようにも見える。あたたかも教室のなかにとじこめられてゐた學校の子供たちが、鐘の聲とともに窓から

飛び出してゆくようなよろこびを聯想させることもある。

散る花は死のさびしさを想わせるが、同時に有限の世界の呪縛から解放されて無限の世界への旅立ちをよろこんでいるようにも見える。

花はかならず散る。人もかならず死ぬ。そして花は散る時楽しそうに散り、さびしそうに散る。わたしたちも死ぬる時楽しそうに死に、さびしそうに死ぬであらう。

桐の花の咲くところであつた。わたくしは北陸を旅して糸魚川驛のプラットフォームに汽車を待つていた。突然わたくしの名を呼んだ者があつた。それは故郷の小學校を卒業して以來三十年振りで會つた竹馬の友であつた。かれは黒部川發電の技師を勤め、妻と三人の男の子と幸福な生活を楽しんでいるというこゝとであつた。

三十年振りで邂逅つた二人はやがて五六分の後には東西に別れて汽車に乗つた。別れる時かれは「東京で逢いましょう」といつて別れた。しかしそれは永遠の別れとなつた。

わたくしはかれの故郷の家に大きな橙の木があつて、冬が近づくごとに黄金色にかがやいていたことや、かれがいつも素直な少年であつたことなどを思い出しながら遠ざかりゆくかれの汽車を見送つた。

二三年経つてからであつた。わたくしはかれの奥さんから、かれが歿くなつ

たという悲しいたよりを受け取つた。かれが最も頼りにしていた愛子が亡くなつたことが、かれの死の原因であつたと書いてあつた。愛子の死のために生きる望みを失つて死んで行つたかれのやさしい心がいたましくも思い出されるのであつた。しかしかれの家庭の不運はこれに止まらなかつた。かれの遺された二人の子たちは相ついで父や兄の後を追つて亡くなつてしまつた。

人生は花のごとく散り易いものとはいえ、この友人の場合のように諦めても諦めきれないものがある。念佛申せど念佛申せど、悟られぬ日がある。

四月花のさかりに釋尊の御誕生を迎えるということとはとりわけありがたい。日本の氣候で一番いい季節であり、野山の新緑も萌え初め、かがやきはじめ、花はほころび、小鳥たちは高鳴きして釋尊の御降誕を祝福しているかのように想われる。

四月八日が來るごとにわたくしたちは子供のころの心に立ちかえる。わたくしの田舎には、古城のような高い石垣を築き上げた禪寺があり、二抱えも三抱えもある老松がそびえていた。四月八日の朝になればわたくしたちは青竹の水筒を持つて、二三百段もある石段をのぼつて禪寺に詣づるのであつた。

本堂の正面に飾つてある花御堂がどんなにか美しく感じられたことであらう。さらに裸かの可憐なお釋迦さまのお姿！青竹の干杓で頭からじやあじやあ甘茶

をかけられても頑童たちのするがままにゆだねておられる誕生佛のお姿は子供たちの仲間になつてくださっているような氣もするのであつた。

たゞ天を指さし、地を指さしておられる御手が、子供心にも何となしに幽玄無限の世界を語つておられるような嚴としたものを感じさせるのであつた。

手に手に青竹の水筒に甘茶を掬み、一文錢二三枚を置いて、その足で山上の學校に行くのであるが、頭痛を封するのだといつては額に甘茶を塗り、腹痛を起こさぬようにといつては臍はらのまわりに塗るのであつた。學校に行つてからは甘茶で墨を磨つて習字の稽古をすれば字が上手になるといつて、机の上にはどの子も甘茶の竹筒をかざつていた。

或る年の春わたくしは北伊豆を旅していた。まだガタ馬車時代であつた。たまたま静かな温泉場の山寺で湯治に来ていた力士と山寺のお坊さんと二人で花御堂をこしらえているのを見たことがあつた。

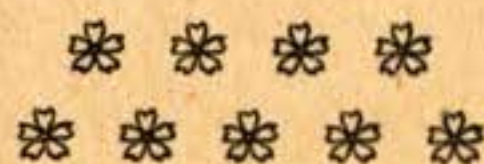
力士と山寺のお坊さんという取り合わせが、面白くほゞ笑ましい氣になつて花御堂の出來上がるのを見ていた。花御堂をこしらえるお坊さんも力士も童のようにほがらかに見えた。あの人たちも花御堂をこしらえている間は子供にかえるのであろう。



花まつり

— 今 と 昔 —

中 村 康 隆



一、街の祭り

街の花祭りについては私なりに思い出もあり苦勞も持った。大正大學の學生の頃には、よく日比谷の音樂堂に香氣に見物にいったものだが、一度だけこれに參畫したことがある。たしか昭和八年頃だつたかと思うが、増上寺に藝術部を置いて小雑誌「淨き園」を中心に文書傳道や藝術活動を起こしかけていた頃のことである、日比谷での法樂清興を全部増上寺藝術部で立案構成し且つこれを實施してくれということで、青森の成田敦淳君など二三人で飛び廻つて纏めたことがあつた。その時は増上寺としても何らかの寄與をしたいというので、文藝作品を募集し、淺草の詩人一瀬直行君の小説を小冊子にして發行したりした。私の意欲としては、せめてそれを十六ミリ映畫化してみたかつたのであるが、私の身邊の事情が、藝術部への奉仕を不可能にし

たので、他の人が部の運営に暫く當つたのだつたが、當時の本山内局を牛耳つた樹下師の退任と共にやがて藝術部の活動にも終止符がうたれたのは残念なことだつた。しかし「淨土」の發刊には、當時の藝術部の連中がその編輯や庶務のスタッフとして參加したことを想えば、一粒の麥の強ちに無駄骨とはならなかつたとなぐさめられる點もない譯でもない。

東京の花祭りへの參加は、それきりだつたが、當時残念だと思つたのは、街での飾り、街や家庭での祭りの見られないということであつた。遅々たる歩みではあるが、東都佛教界の努力で、そうした不満も段々と緩和される傾向にあることは喜ばしい。

私の住んでいるこの街（清水港）での花祭りには幼時の追憶がからむ。毎年花祭りの前の日になると、朝から祖母や母と花御堂の屋根を色々な草花でふくのが、幼い私達の

役目であつた。朝早くから祖母や母と草花を集める楽しさ。やがて花御堂が出来上る。團子なども作つたと思う。翌朝になると、暗いうちから近所の大人や子供たちが瓶をもつては甘茶を貰いに來る。これを飲めば息災延命、眼につければ眼を病まず、作物に掛ければ虫除けになるというのである。祖母や母と代りあつてその甘茶を分けてあげるのが楽しい私達の仕事であつた。私達も小瓶に甘茶を貰つておく。遊びつかれてのむ甘茶のおいしさ。それから學校のお習字の水にも使う。手があがるといふ傳えられているからである。母はまたその日、甘茶で墨をすつては、紙切れに「千早振卯月八日は吉日よ、神さけ虫をせいはいぞする」と書いて押入れや廁などに、「一ぜんめし」と書いて臺所にしたしかに逆さにして貼つたものである。何でも虫除けのまじないだといわれるからだという。私たちの喜ぶ甘茶を虫はどうして嫌うのだろうと不審に思つたことだつた。

この街の花祭りに参畫したのは、昭和六年頃ではなかつたろうか。街の最も有力な會社である鈴與商社の好意や同社の若い社員でつくつていた佛教青年會の人達、同社長婦人を中心とする佛教婦人會などの協力を得て、佛教會主催の下に、街の廣場と舊町役場講堂とで、盛んな花祭りを實施した。廣場に舞臺を造り、幔幕をめぐらし、アーチを作り、稚兒を出し、法會、講演、餘興に時を過し、婦人會の甘茶接待と賣店で終日にぎわつた上に、夕刻からは第二會

場の講堂との間の道路に並べた數十の行燈に點火し、公開講演會を行つたと覺えている。恐らく戦争がなくて順調に育つていたら、この街の花祭りも今よりはもつと盛大になつてたことだろうに、と惜まれてならない。

私が故郷に歸住したのは昭和十八年頃からで、當時は花祭りの日に戦死者の慰靈法要を行つていた。戦後、廿一年秋から四年程、佛教會の常務と會長に推されたので、何とか再び街の祭りにしたいと考え、慰靈祭は遺族會の手に歸し、花祭りは劇場(後に公會堂)に移し、子供花まつりやら、稚兒行列や花車まで出し、浴場には甘茶風呂と甘茶接待をやつて貰い、商店街と手を握つて一週間の花まつり大賣出しやら各町商店街競演の廣告山車をくり出す廣告祭りなどと、素張しい發展を見たことである。それも役員の交替で再び沈滞している様だが、地方的行事としては盛んな方である。ただ私が願つた行事の家庭化の方は仲々に手がつけられない。これはクリスマスの自然流行と違つて相當の努力がいる。しかも地方的規模では動きがとれそうもない。是非これは中央で計畫して貰いたいものである。

一體、花まつりは、我國ではどんな風に行われて來たものだろうか。それも願つてみる必要がある。

二、昔の花まつり

日本の花まつりの歴史は、通常、仁明天皇承和七年四月

八日、「律師傳燈大法師位靜安を清涼殿に請せて始めて灌佛のことは行ふ」とある續日本後記の記事を以て濫觴とするとしてゐる。しかし、四月八日の祝祭の記事は更に遠く推古朝にまで遡り得る。書紀にはその十四年夏四月八日に、丈六の銅像を元興寺の金堂に坐えて設齋（をがみ）したとあり、またこの年から初めて寺毎に四月八日、七月十五日に設齋（をがみ）するようになったという。元興寺の入佛供養は十七年が正しいとされるから、四、七兩月の設齋の始めも、多少その年次には疑問があるけれども、佛教傳來の當初から、大切な佛教の儀式としてうけいれたことは疑い得ない。大化の改新に際して制定された冠位制にあつても、この四・七兩月の齋時には最下位の者も正装して參與すべきものとされている位で、當時既に恒例として實修された重要な儀式だつたことがわかる。

ところで、花まつりが盂蘭盆會と並んで行われたというには、特別の意味があつたらしい。というのは、書紀の天武持統兩朝の記事の中に例年のように此の兩月には使者を遣わして廣瀬と龍田の神を祭つてゐるのを見るからである。つまり、當時の民衆の生活曆にあつては、この四・七兩月は特に同じ意味で重要視された祭り月であつた譯で、私はそれが稲作の順調で豊かな成長と稔りとを祈る祭り月だつたので、この兩月に催される佛教の儀式が最初に並んで大きくとり上げられるようになったのだらうと解してい

る。

仁明紀にいう灌佛という言葉は、佛祖の降誕に際し香水で沐浴されたという故事に基くもので、従つて古くは五色の香水を以て佛像に灌いだということ、甘茶に代えられたのは、徳川時代、晩くも享和年間までの頃とされている。

花御堂花は曇りに匂うかな。

花まつりの語は近來の呼名だが、ルンビニの花園で、今を盛りと咲くアソカの花の下で孤々の聲を挙げられた釋尊の降誕を祝するには最も相應しい。たゞその祝福の祭日は部派により土地により多少の變化があつたので、ビルマやセイロンなどでは今日ではヴェサカ月つまり陰曆三月の満月祭になつてゐるが、日本では支那が灌臘經などの説により四月八日に行つたのに倣つた譯である。新曆だと櫻花の頃だが、舊曆では藤の頃で、御堂の花を集めるには却つて御曆より樂だし、農民にとつても稲作を祈るにはふさわしかつたことだらう。

三、村の祭り

このように、花まつりがその傳來の當初から、農耕の祭りの一節として農民社會に受け入れられたのについては、朝廷の祭祀は別として、その日が農村に於ける田植時の半月祭（上弦の月の祭り）に當つたという素地があつたから

とも考えられる。實際、四月八日が固有の神祭りの日であつたことは、今日もなおこの日を大祭とする社の多いことによつても分る。

福島縣石城郡では、七日八日を神の日といつて田に入ること忌んだし、奥羽の三戸郡ではシガヤウカは遊び日だとして粟の入つた強飯を作つたり近くの觀音さんや藥師さんにお詣りしたりする所があるという。シガヨウカは四月八日の謂で、また卯月八日と呼んでる所も多い。信州北安曇郡などでは卯月八日は山の神の祭日だという。静岡縣の庵原郡の一部でも、朝八日といつて山の神を祭る。山の神はこの日里に降り、收穫がすんだ十二月八日の晩に山に歸るといふので、その方を晩八日と呼んだといふことである。四月八日を大祭とする社には、武藏御嶽のように山麓に祀るものが多い。従つて、諸國に残る行事にしても、連立つて山行きをし楽しく一日を過す例も多い。鹿児島縣下こしき島手打では講中で山登りをし、徳島の劍山々麓の村々では山いさみといつて、高い處に登つて海を見る習はしだというし、岩手縣の遠野町や大槌町地方ではおはなみと稱して重箱を持つて山へ行き、年齢によつて組んで山めぐりをして宿に歸り、つつじの花などを桶に立てた前で重詰をひらいたといふことである。

この日を山の神の祭日としたり山遊びの日としたりする本當の意味は、むしろこのような花迎えにあり、それは同

時に神靈迎えを意味するもので、そこに現わされる神靈には田の神と祖靈とがあるというのが、今の民俗學の説くところであり、究極に於て日本人が田の神として農耕の豐饒を祈つた神靈は實には祖先の靈であつたろうともいわれている。

新潟縣の出雲崎地方では藤の花立てと稱して、その日の朝晴着を着て近くの山へ行き、藤の花房をとつて來て佛壇に供えるという。つまりは神靈の憑代としての花であつたようである。近畿から中國・四國にかけて、高花とか天道花とか夏花、八日花、立て花などといつて長い竿の先にうづぎ・べについじ・石楠・櫛などを束にして庭先や背戸などへたてる風があるし、栃木の眞岡や群馬の高崎地方などでは軒端に藤の花やうづぎの枝を挿す風があり、氷上郡新井村や多紀郡の一部など竿の下に櫛を作つたり、櫛で水をかけて供えたりするところを考え合すると、高花を天道さんやお釋迦さんにあげるともいふ所があるが、盆行事と同じく死者の靈を迎え祭つたものだろうというのが「民俗學手帖」などの解釋である。播磨などでは法華山に一年以内の新佛のあつた家の者がお詣りをし賽の河原に櫛をおいてくるといふし。山上の寺へ詣つた習のあつた所もある。赤城山の東麓の黒保根や東村でも同様一年内の遺族たちが山

上にお詣りする。京都府下や兵庫縣下にも花折はなおりといつて新佛の家とか一般家庭で墓参りをするし、香川縣にも墓参りの風があるという。

一方においては、この日を以て山の神と田の神の御座替りの行われる日だとか田植初めに田の神の降臨する日だとか解する向もあり、甘茶を田に注げば虫除けになるという俗信や、八日花に雨がかゝるのを喜ぶ所のあるなども、農耕祭りとの関連を示すようだ。

こんな風で、農村の花まつりは、古くからの死靈祭りや山の神・田の神祭りなどと関連して行われたのが實際であつた。

佛陀世尊の降誕を祝し、佛恩を報謝すると共に、その加護を祈る心を、古い祭に加えることが、素朴な人々の言わす語らずに果して來たところであつた。

四季の初めの満月の日の祭りが、支那でも古くは四祭とされていたが、その中の四月の祭の欠けたのが三元の兌だという。日本でも四月八日から満月にかけて祝祭が催されたのが、稻作以前の姿だつたかとも想像されるのだが、稻作普及と並行して入つて來た灌佛會の方に祭の日附が重點を移して了つたものかも知れない。兎に角、この世に眞實の心の幸せを齎らした釋尊の降誕を祝して灌ぎかける甘茶

の水を稻田に注ぐ農民の心理には、素朴な呪術的信仰を交えつつも、純な祈念が働いているといえるようである。

幸なるかな、佛陀の降臨を喜ぶもの。

幸なるかな、佛陀の恵みを我家にと祈り得るもの。今年もまた花祭りの春は、人の世に幸を齎らしつつめぐつて來た。(大正大學・助教授)

F.F.D.特選幻燈機(荷造送料500圓)

14,500圓	マスター S 300 100V 300W
24,800	マスター・ルツクス 100V 500W 冷却装置付
16,500	エルモ 100V 300W
14,500	ニコレット C 型 100V 300W
48,000	デラックス 75V 750W

本會付理取次

會員にかぎり一割引にて、御取次致します。一報カタログ送ります。

井川定慶著

法然上人

小川龍彦著

新定法然上人繪傳

最近法然上人傳の兩書を手にし、又恩師石井教道博士と共編の「昭和訂法然上人全集」の校正を傍らにして、遠く思いを七百五十年の昔平安朝の時代にめぐらして、元祖法然上人の尊きみ姿に合掌し、自分の力の足りなさに涙したのであつた。

凡そ平安末期の動亂濁末の世相中に、雄々しくも新宗教——易行易修の法門の必要性を自覺せられ、自から苦惱をなめ、全身全靈をうちこんで具さに苦惱に喘ぐ民衆に、聖道門の難行難修の法門によることなくして、口稱念佛の一行により、彼土に往生し、自から救

はれると説かれた浄土教は、當代社會人の宗教的疑問に答へ、宗教的要求に應ずるものであつたが故に、上下貴賤を問はず世に瀾漫して行き、多くの人々に光明を投げかけることができたのであつた。しかるに、それ程に當代社會層に迎合された浄土教であつても、現代に於てはややもすれば老人の宗教となり、若き世代から疎遠され形骸化された宗教へと、その運命の一路を辿りつつあるのは何故であらうか。放置すればする程、若人の手から離れ行く現状は如何にすべきであらうか。それは、最早現代人の感覺に於て、新鮮味に缺け、現代的センスに乏しき憾みがあるからである。

しからば其の離れ行く運命を辿りつゝある浄土教をして、私達の宗教とするためには如何にすればよいか。それは唯一つ、求道の熱意と努力を傾け、上人が曾つて惱み、且つ求められたように、私達も如何にせばと惱み悩みぬいたあげく、眞の白道を發見しなくてはならない。これを他の言葉を以てせば信仰で

あり、信仰確立の上に自から求むべきものを求め、上人の一舉手一投足に歸仰し、上人の歩まれた道に自から生きゆく礎を見出さなくてはならない。それを歩む捷徑が傳記なのである。即ち傳記は時代の経過と共に敬慕となつて反應し、發露された至情の表現化されたもので、表面的には單なる元祖の歩まれた道——行蹟をつづつたものであるとは云え、内面的には傳記作者の強い元祖へのあこがれ、歸仰の念が全き姿において元祖像をとらえんとする心情、又元祖の人格信仰を世人に知悉せしめたいという念願のもとに成立されたものであつた。而して傳記は時代とともに存在し、その時代、社會環境に順應して成立されたものであるから中世期成立の元祖傳には、夫々のもつ特色があり、就中「愚なる人の覺り易く見ん者の信を勧めんが爲に」繪畫と詞書を交えた傳記の優なるものは四十八卷傳と云はれる法然上人傳である。されば、四十八卷傳成立後の元祖傳には多かれ少かれ、その社會、思想の反映が内在していることは勿論である。だが其等元祖傳は多く上層階級を對象としたものであつて、民衆と共にあると云う

形に於ては程遠い感がしないでもなかつた。その補いを満たし得た點に於て、兩書は渴望を醫するに足るものということが出来るであらう。

井川定慶氏は塚本善隆博士の言を借れば、「法然上人の信仰に生きる法然上人の研究者」であつて、學生時代より終始一貫して法然傳研究の大成を目標に、幾多の論稿を發表し、法然上人傳繪大鑑や法然上人傳全集を編纂した學僧であり、小川龍彦氏は法然研究に傾倒すること三十有五年、その感覺の鋭利纖細と思索の深遠緻密なることは、その學歴及び過去の研究業績が充分に物語つてゐる。

人に兩者夫々の性格があるように、著書に盛られている内容にも特色がある。前者が章を念佛の元祖、榮典、法然上人傳、選擇集、御影に五篇に分け、元祖上人をめぐる諸問題を提起して聖法然の眞の姿を浮き彫りしているのに對し、後者は四十八卷等の諸傳記にのみ依ることなく、當代人の残した史書や口碑傳説等をも出して居り、文に配するに妙を以てした芹澤銈介の版畫、難信難解の宗教現象の解明から佛教語の現代意譯に至るまで、自

然に讀え得て血となり肉となるように構成されてゐる妙趣がある。前者は檀信徒のための施本として、その對象を一應の淨土宗門に心をよせる人に置いてゐるに比し、後者はこれのみに止まることなく現代人のあらゆる層に置いてゐるが、共に法然上人に關心をもたせるべき入門書として好適の書であらうと思ふ。

法然上人の七百五十年遠忌を目捷にひかえ、ようやく法然研究の盛んならんとする時先に推尾博士の「日本淨土教の中核」と井川定慶氏の「法然上人傳全集」を世に問うた宗門が又此の兩書を送り、近く「法然上人全集」の發刊を候つ盛大事にたゞく感涙し、合掌を捧げずには居られない。しかし、先にも云うた如く兩書には夫々のもつ特色があり、長所もあれば短所もあるであらう。それを心して讀み過ごされんことをお勧めする。

△「法然上人」(華頂文庫第一輯)

知恩院布教師會 定價未定

△「新訂法然上人繪傳」理想社

定價一九〇圓

(大橋俊雄)

サンサ・ラマ・ラオ
松岡洋子譯

インドの顔

大分先頃の話だが、街頭録音で、どんな國を理想とするか、という問に、中共とか、インドのような國という答があつた。その翌日の新聞は之をとり上げて、中共はとにかく、あのインドの現實を知らないで、インドの果しつゝある國際上の立場のみで、インドを理想とするのはとんでもないゾ現實無視だと評した。とにかく、現インド外交、日本無罪論佛教の故國等という面に於て、漠然とした郷愁に近いものを我々は持つてゐるが、現實はあまりよく知らない。事實日本人が行つた印象も、必ずしも好しくもないようだ。そういう點から、體臭のするインドを傳えている此小冊子は我々に興味深いものである。著者はインド人で、英米に學び、インドに對する外國人の再認識を促すかの如くである。肩のこらぬインド各方面の紹介。新潮社一時間文庫一三〇圓。

(眞野龍海)

浄土への

たより

拜啓 今年もはやお彼岸様になりましたして御事多い事と存じます。つきましては、本日五百圓だけお送り致しました。何かにお使います。下さいますれば幸と存じます。(松江市殿町 山根カメノ)

× ×
トラクト「正信へのみちびき」は大變けつころですから、寺院や有力者に差上げています。(岐阜縣手道村 圓徳寺(大谷派))

輪廻歌

われらおちゐていそしめは
さけなんむねのやすくある
こよひたまきえほろふとも
をかへにうせぬゆりゑみつ

(杉並區天沼 鳴海要吉)

(之は、明治卅六年から想を練つていたと但書きのいろは四十八文字の代え歌の由、最後の一行の意味が少し判りかねます。いつか萬朝報でも。代え歌を募集した事が

ございましたね。——編輯部)

× ×
浄土發展のため書夜御健斗せられている事を心より喜んでいゝ一誌友です。

つきましては現在スライド布教に行詰つてゐる次第ですから何か適當なスライドがあるなら、そのカタログなりと御送付下さいませんか。(熊本縣 富岡區壽學院 山城賢亮)

× ×
私は上磯町の日本セメント會者と連絡を取つて従業員に家族に幻灯をやつて居ります會社でも數十本のスライドを購入して居りますが、親鸞上人御一代記などもありますしかし法然上人の御一代記は「法然上人さま」子供用のみ。これは青年や成人には殆んど教化にはなりません。最近熊谷入道や瀧口入道を買入れてやつてゐますが、皆が感銘してくれます。吉田絃二郎先生あたりに、おねがいして元祖様の御一代を劇化し、教化的なスライド二巻位作つて頂けませんか。親鸞上人の一代記をやつて居ながら、元祖様のスライドのない事が残念に思われてなりません。(北海道 上磯町谷好寺 永塚永全)

(いつか御紹介しましたように、吉田先生も、法然上人の劇化というのはなかなか人物が大きすぎて書きにくいと申されております。私共もいつも期待しておる事であり、勿論スライド化についても、その中、何らかの方法で要望を満したいものだと思います。スライド、幻灯機は、本會でも責任をもつて代理取次しております。——編輯部)

× ×
……今日佛教界が振わない原因は自信教人信の僧侶が少い事に依るのではないかと存じます。その意味でもつと、學界に於ても學德兼備の念佛信仰に生きる高僧方の指導によつて若き僧侶の社會進出を計る事が急務と思います。(神戸市 兵庫區塚本通二ノ八ノ五 新谷哲亮)

會員のたよりをどし／＼お送り下さい。
御意見・ニュース・感想等何でも結構です。取捨は御一任下さい。

宛先……東京都港區芝公園五ノ十

法然上人鑽仰會

浄土へのたより係

印度・ネパールの

佛 教

壬 生 台 舜



I、インド

印度は釋尊誕生の地であり、佛教發祥の國である。従つて日本の佛教徒にとつて、印度は「心のふるさと」の如く、特別な敬慕の念を以て考えられる。そして、一生に一度佛陀伽耶に參拜し、印度の佛教にふれたいと云う悲願を抱かぬ佛徒はない。しかし、現實のインドの宗教状態は、およそ非佛教徒的な雰囲気満ちているのに驚かされる。

印度の最近の人口調査（一九五三年インド政府の出版物）によると、印度は非佛教的な現實だと云う事が數字

の上ではつきり理解出来る。

（全人口三五六七十萬人 一萬分比）

ヒンズー 三〇三二十萬人 八、四九九

シーク 六二 一七四

ジャイナ 一六 四五

佛教 二 六

ゾロアスタ 一 三

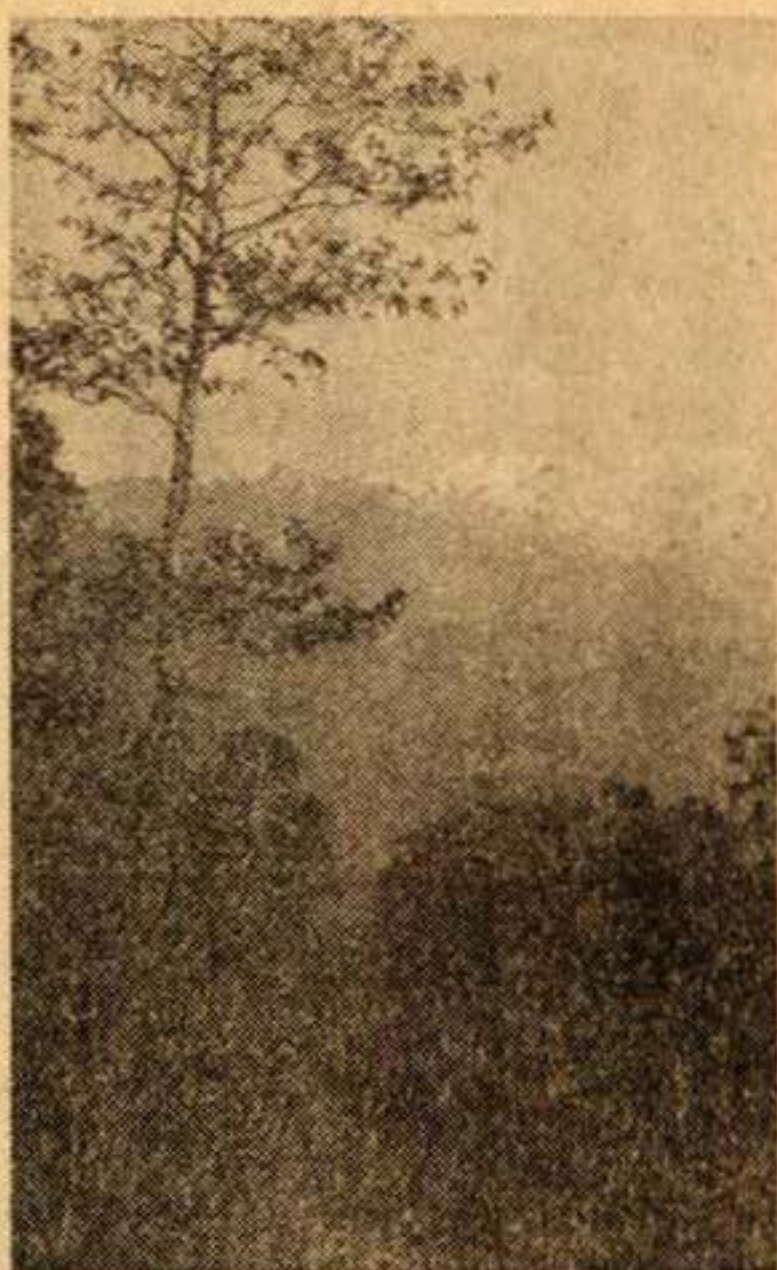
回教 三五四 九九三

キリスト教 八二 二三〇

その他 一八 五〇

即ち、三億五千六百七十萬人と云うインド全人口に對して、僅かに。二十萬人の佛教徒あるのみ、しかも、その約半數は西ベンガル州にある。此の様に現状は誠に劣勢である佛教も、曾ては全印度に宣布されたもので、佛教遺跡となると、その數は多く、且、その規模も大きなものがある。しかし、ナールンダの如く昔の盛時をしのばせる規模であつても、廢墟に過ぎぬので、生きておる場面は何れも極く小規模なものである。

釋尊初轉法輪の地、サルナートにしても、昔をしのぶ、阿育王碑が、發掘の廢墟に、さびしく保存されているわけである。その隣地



にコンクリートの初轉法輪寺があり、野生司香雪畫伯の釋尊一代記の壁畫が誠に立派にかげられ、その門前にはセイロンの比丘達か日夜、佛教に精進していても、往時に比すればさびしき限りと云わねばなるまい。

印度の佛教、シナの佛教、日本の佛教、確かに佛教精神は一貫したものがあつたが、夫々の國土相應の宗教として發達し、夫々興亡の歴史がある。印度の如きは、生きた昔ながら佛教は既にほろびたの云つてよい。今あるものは、セイロン又はビルマの傳來佛教でありチベット佛教の浸透であると考える方が適確であらう。

佛教は何故にインドからほろんだか、回教徒の浸入とか、佛教内部の墮落とか、色々な原因が云われるが、インドアーリアン民族の正統思想は非佛教的なものであつて、大多數のインド人は自己の非傳統的思想たる佛教思想を好まないと云う宿命的な運命があつた様である。それは、四姓の階級が古來よりの印度民族の傳統思想である。然るに、佛教は四

姓平等を提唱し、無我に基く人格の平等性を主張した。釋尊は階級思想によつてガンジガラメになつたインドの現實に直面し、インド民族の幸福のため、思想國家建設のために、宗教改革をしなければならぬと云うやむにやまれぬ大慈悲心の發露が佛教の誕生となつたものである。阿育王にしても、個人的な安心立命を佛教に求めた點もあるが、國家をどうするかと云う政治問題にぶつつかかり、人民の眞の幸福、國家の理想的建設には四姓の打破

をしなければならぬと云う大問題の解決を佛教に求めたものである。四姓の階級制度は今日に於ても、インドの一課題で、職業の制限結婚の制約は元より、日常、隨所に奇異な場面を我々外國人は見る。近代國家の建設を目指すインドがかかる封建的な階級制度を打破する爲には、先づ宗教改革を斷行しなければならぬのであらう。その時こそ、再び佛教がインドに於て、クローズアップされる事であらうと信ずる。

Ⅱ、釋尊成道の地、ブツタ ガヤ

さもあれ、所謂、數多い佛蹟の中でも、釋尊成道の地、ブツダガヤは、佛教淵源の地だけあつて、チベット人、ビルマ人、セイロン人の巡拜團が集つてゐる。殊に、チベット人が、老いも若きも、五體投地で、百五十呎の方塔の周圍を右繞參拜しておる有様は誠に感慨のきわみである。一々立禮し、そして地に身體を投げ出し額を大地にすりつけ、自分の身體の長さだけ、尺とり虫の様にしたりする眞摯な姿は、切々と心うつものがある。そ



して、他のチベット人は、オンマニバドマフームと稱え乍ら、大路をめぐり、泊りがけでお参りする姿、わけでも、チベットの活佛が弟子達を連れて、釋伽像に供養しておる事など、聖地ならでは見られない光景である。

菩提樹下の金剛寶座は二千五百年の昔ながらのおもかげをしのばせている。菩提樹は二代目とか云つておるが、樹下石上の往時を髣髴とさせ、全く感慨無量のものがある。

Ⅲ、ネパール

ネパールは獨立王國であるが、インドの勢

力下にある。全人口約八百萬人、周圍は高い山々にとりかこまれている。その中央にカトマンズ盆地があり、首府カトマンズがある。非常に親目的な國であるが、ビルマやシッキムと違つて、佛教國ではない。シバ道とブツダ道とに分けて、ネパールの宗教を論じておるが、シバ道と云われる、印度教的要素が過半分を占めている。そしてシバの寺には参詣人が多いが、佛塔は参詣人が少ない。しかしネパレーゼの寫字梵本は非常に多く、學界未見のものも少なくない。その一部は、最近、大正大學研究紀要に金子良太氏等によつて詳細な報告が出ている。つまり、インド佛教全盛時代にはネパールも全く佛教國であつた名残りである。釋尊誕生の地ルンビニーも、ネパール領で、その阿育王碑は有名である。現存ネパールの阿育王碑は一つであるが、まだ三ヶ所ほどネパールにあると云う話である。その三ヶ所の碑文は破損をおそれて、塚の様に埋藏してあるようで、それらしきものを一ヶ所みた。カトマンズの東三哩半の處にあるバウダの佛塔にしる、又、西方の丘の上に立つ、スバヤムブナートの佛塔(ビルマのスウ

ーダゴンバコダに似る)にしる、参詣人が極く少ない。それに比べて、シバの寺には大勢の参詣人がある。「ネパール文化史に就いて」と云う、チャトバダイ氏の論文をみると、ブツダ道とシバ道との混合した——丁度、日本人の「神」や「佛」に對する一般概念の如く——宗教觀念が、ネパール人にひろまつておると記されているのが、實態であらう。

Ⅳ、シッキム

インドの北、國境の町カリンボンからジープで四時間の行程の所に、首府ガントクがあ



る。シツキムは、極く小さい獨立王國でマハ
ー・ラジャーが主權者であるが、全くインド
の勢力下に屈服されて仕舞つた。國の總人口
十六萬人、首府ガントクの人口六千人と云う
から、その大きさが窺わ

れる。外國人の出入國が
非常に嚴格で、仲々許可
が下りない。が、幸いに
特別の便宜で、金子良太
氏と同行入國することを
得た。國全體が山岳地帶
で、風光明媚、人心素朴
である。チベット文化が
浸透し、ラマ教寺院が多
い。その最も立派なもの

は、王宮の隣りにある。ローヤルモナストリ

ーである。周圍五十呎で、高さ八十呎程、内

部は三階建になつてゐる。内部は金箔の目も

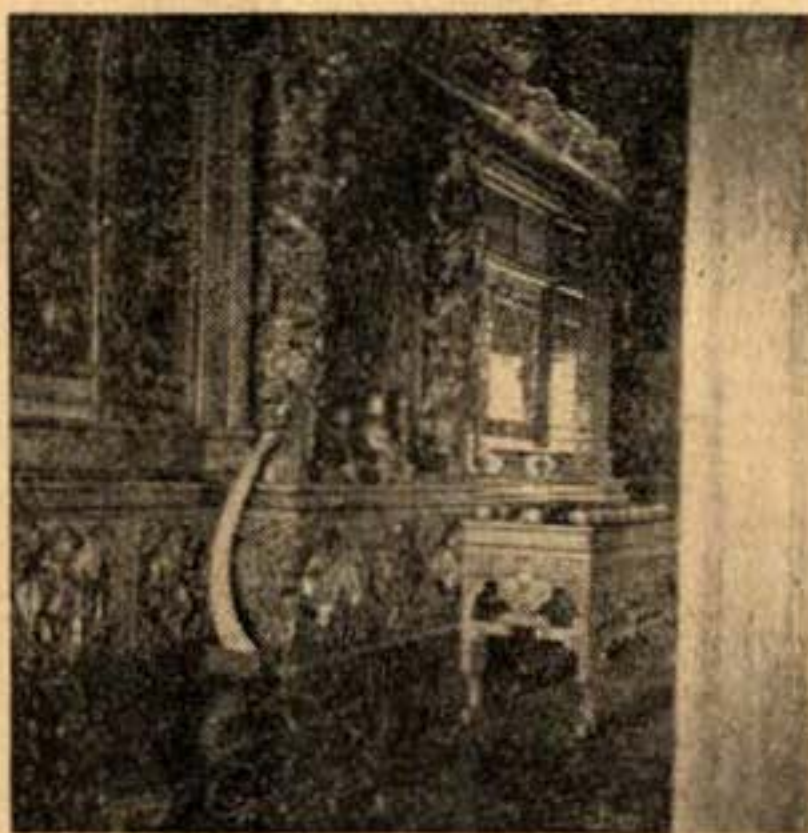
まばゆいもので彫刻もすばらしい。正面に佛

像を安置し、左右にはチベット大藏經が所藏

されている。又、中央には、シツキム人やチ

ベット人の僧侶が坐つて讀經している。此の

外にも、シツキムにはラマ教寺院が澤山あ



り、一番大きなものは三千人の僧侶がおる。

この事でも解るように、佛教國であり、しか

もチベット佛教のニンマバ(古派)とサツキ

ャバ(薩迦派)が行われている。ニンマバは古

いチベット佛教の一派

で、チベット本土では

余り盛んでない。シツ

キムや北インド及び、

西インドのラダック地

方に行われている。此

の派では、僧侶が酒を

のみ、且、修行が進ん

だラマは女に近づく事

が許されている。従つ

て、ニンマバの僧院の

中には、女人在同居しておる處もある。

(大正大學助教授)

(寫眞14・15頁は、カンチェンジュンガを

望む。16頁上はブダガヤの佛塔を五體投地で

禮拜しつつ廻るチベット人、16頁下はシツキ

ムの續經するチベット人、17頁はローヤルモ

ナストリーの内部、いづれも筆者撮影)

編輯だより

○毎號本誌卷頭を飾つていただく吉田紋
二郎先生は先月末より、御不快にて、
來號はお休み頂く事となりました。一
日も早く先生の御回復あらん事を會員
の皆様と共に祈ります。

○次號より、佐藤賢順先生の「若い人々
のために——宗教入門」を連續掲載致
します。御期待下さい。

○同じく次號には、毎日の山崎安雄氏が
淋しい未決房に悶々とする天涯孤獨の
青年に愛という花を初めて咲かせた女
性の便りをめぐつて、一文を頂くこと
になりました。善光寺の丸山園水師よ
りは「五月の善光寺」を。鶴田湛泉氏
も毎號、法然上人の時代に關連した榮
枯盛衰の物語を寄稿下さつております
が、次は「新島守」です。

ハイライトは本號は休みまして、次
は「良寛上人」を新保義道氏が。

啄木の墓に詣でて

須藤隆仙

俺は死ぬ時には函館へ行つて死にたい。

啄木のある手紙の中にこう書いてあつたそう
だ。啄木は函館に相當深い愛着を感じてゐた
のである。

啄木の墓は函館にある。臥中の山の裾野に
多くの墓と一緒に啄木の墓はある。

私は一日彼の墓に詣でた。

可憐な乙女心のような歌の中から私は彼の墓を
必要以上に細く美しく想像してゐたのである
が實際はそうではない。

ずんぐりした横太い墓で中に方形の銅板がは

め込まれ、東海の、の歌が刻まれてゐる。

かつて城ヶ島へ渡つた時白秋の碑を限りなく
美しく観上げたが、啄木の墓には私は何の美
しさも感じない。

風景は良かつた。啄木の墓から函館の街の
横腹をのぞむと實に美しかつた。

丁度眞向いが湯川トラビスである。

私は函館がきらいである。函館のどこにも
其の良さを知らないが、啄木の墓から眺めた
函館丈は確によかつた。

啄木は北海道へ三度渡つたのだそうであ
る。初めは明治三十七年の十一月、彼が十九
の時だそうである。その次は明治三十九年の
二月、二度とも小樽に住む義兄、山手千三郎
氏に生計補助を頼む爲だつたそうだ。

翌明治四十年五月五日、三回目の渡道、こ
れこそ彼の生涯の新出發となつたのである。

郷里岩手で代用教員をしていた時、反校長
運動に關係して免職となつたのである。

石をもて追はるる如くふるさとを

出でしかなしみ消ゆる時なし

此の歌と共に函館へやつて來たのである。

函館では紅苜蓿ベニマメと云う文學誌がありその同
人の招きによつたものらしい。

「青柳町四十五番地なる細き路地の中、同
じような長屋の左側奥より二軒目と賀とい
う一小學校教師が宅の二階の八疊」こゝが彼の
住いだつたのである。

この二階からやがて不朽の詩、水無月が生

れた。

砂山は長くつづきてみなづきの、陽は照りかえり、砂はむす海草の香はいと強く、ながれる。あはれ、陽によりて、なくなる鳥のいそひばり。歌はも高し

彼はまず命をつなぐ爲働いた。

初めは函館商業會議所に入つた。其の時の日記が面白い。

「天が曇つてゐる時に雨が落ちた。今日か

ら函館商業會議所に出ることになつた——中

略——這入つてみるとやはり横目縦鼻の人間

が五人許りいた。見るからに無能らしい面

構への吉田といふ洋服男へ行つて挨拶をす

る。後で聞いたのだがこれは盛岡人なそう

だ。どうも同國の人間にはこんな顔をした

のが多いのではないだろうかと思つて一人

で可笑しくなつた」

日給は六十錢だつたそうである。

この後、函館區立彌生小學校の代用教員と

なつた。この學校は私の母校で廊下に啄木の

寫眞がかけられてゐる。月給十二圓、濫民村

の八圓よりは優遇であつた。小學校をやめて

からは札幌の新聞社へ入つた。函館を去るに

のぞんで

あわれかの眼鏡の縁をさびしげに

光らせてゐし 女教師よ

と歌つてゐる。女教員橘智恵子なる女と戀仲

になつてゐたのである。

浪漫主義から自然主義へ、そして社會主義

へと、彼の思想遍歴は轉々たるものがあつた

が、函館では、濱風の強い砂山に、その荒涼

さの中に革命と反抗と暴動との憧憬を訴えて

強い愛着を感じてゐたのである。

砂山は水無月の詩以來彼の歌の中に多く歌

われてゐる。

砂山の砂に腹這ひ初戀の

いたみを遠く 思い出づる日

大という字を百あまり砂に書き

死ぬことをやめ 歸り來れり

いたくさびしいピストル出でぬ砂山の

砂を指にてほりてありしに

ひと夜さに嵐來りて築きたる

この砂山は 何の墓ぞも

その外この地を去つてからでも、

潮かほる北の濱邊の砂山の

かの濱なすよ今年も咲けるや

と歌つてゐる。

啄木を薄幸の詩人と云う人があるが、私は

決して彼を薄幸だとは思わない。

自由に笑い、自由に泣き、そして自由に歌

つた彼の生涯は今も尙、かがやかしい跡をと

どめて永く大きく進んでゐる。

啄木の墓の前に私は、人生と云うものを深

く深く考えさせられるのである。

× × ×

知恩院を訪ねて



大橋 俊雄

布團被て寝たる姿は古めかし

起きて春めく知恩院の

其の樓門の夕暮れに……

秋は色増す華頂山

時雨を厭ふ唐傘の……

どこからともなく「京の四季」の一節がメロデーにのせられて靜かに流れてくる。東山の櫻は今をさかりと咲きにはい、花のうてなに集う老若男女の群は三々五々、知恩院の山門をめがけ、すいこまれるように歩んで行く。

去る年の卯月の始め、知恩院での「秘寶公開大展」に態々西下した私は、洛東華頂山の麓なる知恩院の境域に足を運び、七百年の吉水の法燈をかざる数々の秘寶に目をうばはれ、一心に見入るのであつた。そして其れが元祖法然上人の七百五十年遠忌事業の一環としてなされた聖業に、唯々歎喜し、法燈の不滅を信じつゝ、永しなえに宗門の榮え行くことを祈るのであつた。私の生活は元祖上人を離れてはあり得ない。元祖上人と共にある姿、念佛を申させていたゞく生活こそ、私にとつて至上の日常のいとなみである。春夏秋冬四季とりどりに山の色は變り、樹々の裝いを異に

するけれども、どこか斯うした時代的な變遷を脱して常住不變に似た如何にも莊嚴味をそなへた知恩院から受ける雰圍氣が何となく好きである。鎌倉の昔から南北朝、室町、江戸の各時代を経て明治、大正、昭和へと、開創以來七百八十年にもなんなんとする短くもない此の寺の歴史を思うにつけても、夫々の時代の文化と云うか特色というか、移り過ぎ去つた時代々々の香りを止めているような氣がして、贅しい自分の詩情をいやが上にも揺り動かし、ゆとりなき自分の心を落ちつかせてくれるのである。と同時にさゝやかな私にも信仰心が湧きでてくる、だから此處に詣でた時、眞先にお詣りするの元祖上人の祖廟なのである。そこで念佛回願をすませ、南隣の一心院に稱念上人の墳墓を訪ねてから、境内の一木一草に、幾とせかの昔に心を馳せ、開宗の頃を偲ぶことも一再ではない。陽運感夢の廟堂に佇みては元祖法然上人の靈格にふれ、宏壯麗な殿堂に賽しては歴代護持の洪業を偲び、信長、秀吉、家康等爲政者の深厚なる外護を願うものは獨り私のみではあるまい。蒼穹に聳える老松古杉に武人爭鬪の故事

を尋ねて見たいとも思い、歳毎に枯れては芽をふき、死しては生きるものと知りながらも、眞葛ヶ原の名もなき草や、大谷池畔の蟲の聲にも千古の史話が秘められているような氣がしてならない。

參道が三門に至るところから祇園や八坂神社にかけては櫻樹が多く、曾つて見事な枝ぶりを人目に留めさせていた枝垂れ櫻は今はその二代目とか云つた若木が植えられているにすぎないが、それは今に始まつたことではないらしい。「堀河の水」には「もとより此院に櫻數株あり、近き年、又三門の前にあまたうへられて年々の春ごとに並木の花色をあらそひ、京の人々衣裝をくらぶる事、うき世の外のこととす」と記し、「京城勝覽」にも「此寺上にも中段にも、下にも所々櫻多し、下面になみ木の櫻あり、洛外にて此地と御室との兩所には花多し」とある。

歴代の天皇も深く此の淨土宗に心をよせられ、中にも後柏原天皇は殊更に尊崇厚きを加えさせられて、大永四年（一五二四）正月、知恩院二十五代の超譽存牛に鳳詔を下し、京畿の門葉を知恩院に集め、一七晝夜の間元祖

法然上人の御忌を修せしめられたのであつた。これが、今に御忌法要として、關の東西を間はす知恩院に、増上寺にと修せられる法會の濫觴で、以來毎歲正月十九日より二十五日まで古式に則り嚴修せられてきたが、それが明治十年陰歷正月を陽歷四月に營むように改められるようになったのである。「京の風俗年中遊樂を事とす、知恩院の御忌を以て春の遊樂の始めとなす」とも言はれているように、昔の京の人々は御忌の訪づれを、春の遊樂のきざしと待ちあこがれ、指折りかぞえて楽しみに其の日の早やからん事を急じていた。そして其の法會は、盛んなるものがあつたようで、「都名所事」には

正月十九日より廿五日まで圓光大師の御忌の法事あり、淨土一宗には動まるといへどわけて四ヶの本寺には洛中洛外の末寺集りてとりおこなふ、糸竹の聲は紫雲のさそひらんじやのかほり道場にみたり、誠にねがひゑてはかの淨土に生れんといかばかりとうとし

としるしているが、鶯張りの廊下三百間に紅紫とりどりの装いも美しく群れ集う僧侶の姿

は、去此不遠の淨土をえがき、自から合はせられる掌に、信仰の培養がなされ、み佛に元祖さまにと、敬虔の念が生まれてくる。これこそ信仰であつて、外に何ものがあるであらうか。絶對歸依の姿こそ、眞に尊いものへの憧憬の姿なのである。

大殿にぬかずき、勢至堂に元祖の昔を偲び更に祖廟に近づく緊張と敬虔な心は、何時か心は元祖弘教の昔に馳せていて。こゝは終焉の地大谷淨室の舊址で、崖上に仰がれる靈廟こそ、靜かに永しなえにねむります元祖の御遺骸を飲めた靈地。こゝから立ち去るでもなく唯ひたすらに合掌し、念佛をとなえる私。只一心に淨土宗の行く末を考え、邪雜を去つて明るい宗門の到來を思い念ずる私は、祖廟にぬかずき念佛するうちにも、目には涙をたゝえ自分の不甲斐なさにはじ入るのみであつた。上人にお會ひ出來た心地に、中々立ち去りがたい思いを残して、又もと來た山狭のような道を、捨世派の本山一心院に、稱念上人の靈廟をぬがずいた後、靜かに降つて行つた。

勢至堂の地は元祖が配所より、建曆元年（一二二一）十一月歸洛の際、青蓮院の慈圓僧正

の沙汰によつて、既に荒廢していた吉水の御房が居住に堪えなかつたので興えられた南禪院という房舎のあつた所で、終焉の夕まで待つた聖地である。青蓮院の支配の下に、汲々として念佛信仰の弘通に甘んじなければならなかつた靈地も、戰國争亂の難もようやくおさまりて信長、秀吉の世となるや、知恩院にも幾ばくかの増領があつたが、しかし其の以内地とても今の如く廣大ではなく、伽藍も完備されてはいなかつた。宏壯なる境域、雄麗にして落ちつきのある殿堂、堂々宇内に冠絶する今日の知恩院の偉容は、慶長八年（一六〇三）徳川家康が、其の前年の八月伏見城でなくなつた母傳通院殿の菩提のために寺域を擴張し、大いに諸堂を營構したのであつた。「栗田記」に依れば、現今の中下二段の地にあつた青蓮院の領地及び常在光院、太子堂、金剛寺、親鸞上人墳墓などの諸寺院を他所に移し、其跡を收めて、中段に大御影堂、集會堂、大小方丈、大小庫裏等を造營し、下段の地には廿餘ヶ寺に及ぶ塔頭支院を設けしめたもので、この寺域擴張を慶長恢弘と呼んでゐるのである。かくて勢至堂の地にのみ、十四世紀以降元祖法然上人の祖廟を中心とする信仰中心の道場を形成しつゝあつた知恩院も、

信長秀吉家康と三代に亘る政權主導者の外護を得て、寺構は上中下の三段に及び、東に華頂山を負い、北は青蓮院に隣り、西は白川筋に界し、南は圓山・祇園社に接する宏壯なる寺域を占めるに至つたものである。

この邊のことを京の人達は「大谷」とも呼んでゐる。もとは知恩院というよりも、否知恩院のことを大谷と呼んでいたらしく、後奈良天皇から「大谷寺」の勅額を賜はつたのや、「元亮釈書」に法然上人傳の標題を「大谷寺源寶」としてゐるのは其の一例であつたらう。一體に、谷の流れを仔細に訪ねてみると、それは今の太鐘堂の後にある螢の岩窟邊りより源を發し、太鐘堂の北に出で御影堂と茶所との間を流れて、三門の北に沿ひ、光玄院の地から西に直流、山内支院の間を通じて、門前の白川に入つたものであつた。今に大方丈の前には、大谷池があり、吉水の元祖の庵室は大谷禪房と呼ばれ、元祖はこの背に華頂の翠巒を負ひ、平安京を一望に收めて西山をのぞむ大悲傳普化の好地に、他に暫住兼帶の地が多くあつたとは云うものの、獨り此の大谷の地のみ多年永住の地と定められたものであつた。今にある時の有様を追憶することは出来ない。七百五十年の歲月のへだたりは、その

時代のもつ日進月歩に進み行く歴史のうちに大いなる變遷をとげ、慈鎮和尚の詠んだ

我戀は松を時雨の染めかねて

眞葛ヶ原に風さはぐなり

の風情は一變し、大谷池畔の慈鎮石が、その歌と共に昔日の名残りをとどめてゐるにすぎない。花の漸くほころびかける頃、此寺の境域に史蹟と傳承を採ねることも與なしとせな。しかし、慈鎮石とても、元から此處にあつたのではなく、三門の東南隅眞葛原にあつたのを、天和元年に所司代稻葉丹後守越智正通が中井主水に命じて移さしめたものといはれてゐる。

御影堂と阿彌陀堂との小徑を、北門にとり三曲りばかりして黒門に出るあたりの石疊みと雄大な崖石、それから土塀にのぞき窓のある様式は寺院建築というよりも自づと城郭を偲ばせる建築法である。これについては、江戸時代の頃、幕府が萬一の際に此の靈城をそのまゝ攻防の據點と考へていたという俗説も殘されて居るのであつて、「開宗祕密記」と名附ける著書には、その顛末が詳しく縷述され徳川幕府が如何に皇室に對し危惧の念をいだいてゐたかを知ることが出来る。しかし今次の戦災は、かゝる貴重書の存在をも認めず、

灰燼の歸する所となつてしまつたらしい。今は見るに書なく、會つて拜見せしうつる覺えに、心に留めてゐるにすぎない。元と桃山の城門であつたと云う由緒に富んだ黒門をあとに、三門の偉容をながめつゝ、眞葛庵の門をたゞいて見る。祇園社より知恩院山内一帯の地は眞葛原と呼ばれてゐた。順德天皇は

深山より松の嵐や通ふらん

眞葛原に露そこぼるゝ

と讀まれ、慈鎮は

風さはぐ眞くずが原の夕ぐれは

みやこに知らぬ秋の山かぜ

(拾玉集)

眞くず原あきかへりぬる秋くれは

風こそ人のこゝろなりけり

(月清集)

の歌を、又「我戀は松を時雨の染かねて、眞葛ヶ原に風さはぐなり」の歌をよまれたのも眞葛原での事であつた。風さわぐ眞葛原の月にうそぶき、風に吟じた姿は、天台座主という地位をはなれて、風流人としての地位に立つ和尚の姿にこそ、眞の味があるようにさえ思はれるのである。彼は流罪赦免、歸洛勅許の元祖上人に、大谷の坊舎南禪院を附與した人で、實に法然にとつても、門第乃至門葉

にとつても忘れることの出来ない大恩人なのである。

知恩院を下つた私は最後のコースを華頂會館にとつた。尾張一之宮在に所用あつての歸途、どうせ此處まで來たのだからと足を延ばして來たとは云うものゝ、その目的は「知恩院の祕寶展」を拜覽する外には別の意圖もなかつた。卯月の十二日、夜行から夜行への旅と、昨日の心勞にいきゝか疲れは出たが、目を張るばかりの寶物に疲れは何時の間にか私の體には宿つていなかつた。何とも云えぬすが／＼しさと、尊嚴さに心をうばわれ、春の午後を有意義にすごし得たのであつた。傳藤原隆信筆の元祖の御影、早來迎圖、託摩法眼の七幅繪傳、四八卷傳、傳重源將來の善導大師立像、元祖の所持せられたものという獅子蓋付柄香爐、重源所用の笈等々と直接間接に元祖上人の御眼にふれたであらう宗寶の品々七十五世の門主松翁養鶴徹定上人の蒐集にかかる天平の古寫經の數に。祖父瑞峯の師で、長らく徹定上人の執事長をつとめた伊勢天然寺吉水幽譽の法系との關係もあり、そして其の逸話を昔がたりに聞いた事のある私は、今となつては本場奈良の古寺も瞠目するであらうばかりに並らべられた天平寫經に目をやり

暫くじつと、その思い出にふけつてゐた。會館の一堂に、所せまきまでに陳列されたものの中には、徳川將軍との關係のものも可成りに見出され、その點數は七十二點ばかりに及んでゐた。最後に拜見した、旋風葉という珍しい裝幀を施した平安初期の行體をとどめる「十二門論疏」(卷下)は、奥に源空の二字が本文とは異筆ながらに花押を添えている所に、恐らくは元祖上人の歳經披閱の砌り御覽になつたであらうことを思い出すだに感慨無量であつた。

門外不出の數々の寶物が、七百五十年遠忌を記念して展覧され、親しく接することが出来るようになったことは、私にとり此れ以上にうれしいことはなかつた。寶物の展示を通じて衆生に結縁せらしめる所にこそ、念佛弘通のよき機縁が生じないとも限らない。その遠忌も、早や數年の後にせばまつてゐる。宗門に與えられた、そして私達の雙肩にかけられた責務を夫々の立場で解決し、明るく清い吉水の法統をいつまでも永しなえにたまちつゞけて行きたい。日の西に傾きはじめる頃、今日の有意義な日の送られ得た喜びを、胸一杯におさめて、古門を京都驛にといそいだ。

佛典物語 白象平和を

新保義道

昔印度に、カーシーとビデーハと云う二國が國境を接してあつた。相隣りする二國間に紛争の起るのは何時の時代でも同じである。

些細なことが原因となつてこの二國は戰端を開いたのであるが、ビデーハ國王は一頭の巨象を飼ひ馴していた。この香象の威力で苦もなくカーシー國王の軍隊を打ち破つてしまつた。

戰爭に破れたカーシー國王は無念やるかたなく、この復讐を心に誓ひ、

「自分も何とかして香象を手に入れ、そしてビデーハ國王の軍隊を蹴散してこの恨を晴したいものだ」

と、家來を八方に遣して香象を探し求めさせた。その内家來の一人が

「山の中に一頭の白い香象のいるのを見つ

けました」

と報告して來た。王は早速國內に

「山中にいる白い香象を生捕つて來た者には、重き恩賞を興える」

と觸^ふを出し、この香象を生捕る者を募集した。或る人がこの募集に應じ、多くの人々を驅り集めて件の香象を生捕る爲に山中に出かけ遠巻きにして生捕りの態勢を整えた。

一方象は之を見て、これ位の包圍を破つて逃げ去ることはいと易いことではあるが、考えて見れば自分には盲になつた年老いた兩親がいる。若し遠くへ逃げて行けば自分の身は安全であるが、兩親が飢え死せねばならぬ。それよりは王の處へ行つて何とか話をして又山へ還して貰うようにしようと、おとなしく生捕られた。象狩りに來た人々は意氣揚々と

この香象を引いて王のところへ行つた。

王は非常に喜び、象の爲に立派な小屋を建て、その中には毛布を敷き、家臣に命じて象の好きな音樂を奏させ、立派な食事を興えさせた。ところがこの象は何ものをも口にせず樂しまない様子である。

之を見た象飼はこのことを王に申し上げると、王自ら象舎へ行き、象に向つて

「お前は何ものも食べないそうだが、何故食べないのか」と問うと

「自分にはまだ兩親共に生きてゐるが、年老いた上に盲目である爲、自分が側にいなければ兩親に水や草を興えて呉れる者がいない。兩親が食物が無くて飢しい目をしてゐるのにどうして私だけが、美味しいものを食べる氣になれましょうか」更に象は王に向つて

「山で包圍された時、若し自分が逃げる氣になればどれだけの人が居つても逃げる事が出來たのですが、敢ておとなしく捕えられたのは盲目の老父母が居るからで、若し王様が自分が父母の處へ歸つて

孝養をつくし、天壽を全うさせることを
お許し下さるならば、その時は必ず王様
のところへ還つて参りますが……」
と、しみじみと語つたのである。

王はこの香象の言葉を聞き、

「あゝ、象であつてもこのように父母に對
しては孝養をつくすのであるか、それに
比べて我國はどうか、父母を惡み賤しむ
風潮が全國に満ちている。恥しいこと
である。自分は人の顔をした象であり、こ
の象は象の顔をした人間である」
と、その孝心にいたく感動して象を父母の處
へ放ち還らせた。

一方自分の領民に對し

「唯今より、我が領内にある者にして、若
し父母に對して孝養をつくさず、恭敬の
誠を致さない者があるならば、大罪に處
す」

と嚴命を下した。

かの白香象は父母の處へ還り、天壽を全う
する迄、不自由な兩親に仕えて充分の孝養を
つくし、兩親共に他界したので王との約束通
りカーシー國王のもとへ行つた。

王は待ちに待つた白香象がもどつて來たの
で大いに喜び、早速象に武裝を整え、ビデー
ハ國復讐の軍を起そうとした。この時この象
は王に向つて、

「王よ！如何なることがあつても戦争と云
うものは止めるべきである。戦争と云う
ものは双方に多くの死傷者を出し、勝つ
ても負けても怨みの残るもので、百害あ
つて一利もない、若し王さえ許して呉れ
るならば、自分は單身ビデーハ國に乗り
込んで、ビデーハ國王に向つて、ビデー
ハ國とカーシー國の間に永遠に争の起ら
ないように話をして参りましょう」

と、進言した。すると王は

「お前はその様に云うが、若しビデーハ國
に行つたならばかの國に止め置かれて、
再びこの國に還つて來ることが出來なく
なるのではないか」

と反問した。白香象は

「いや、どのような方法を講じても私は目
的を達成して還つて來ますから御安心下
さい」

と云つて、ビデーハ國に向けて出發した。

ビデーハ國王は白香象が自分の國へ來たこ
とを聞いて非常に喜び、王自ら象を迎えて
「お前は、どうか我國に永住してこの國の
爲につくして呉れよ」

と頼むと、象はビデーハ國王に向つて
「折角の仰せではありますが、自分はこの
國に永住することは出來ません、ビデー
ハ、カーシーの二國はお互に相争つてい
ますが、お互が怨み憎しみの心を捨て、
隣邦相助けて平和の國を建設し、平和な
生活を営むことが本當の國王のつとめで
はないでしょうか」

勝利を得れば怨みをうけ

敗北すれば憂苦多し

斗争をせざるこそ

これ最大の幸福なり

と云う詩を示して、二國間の和平と平和國家
建設を力説してカーシー國に還つた。

それ以來この二國は平和な關係を持續し、
カーシーは親不孝の惡風止まり、孝養高き國
として榮えたことである。

(知恩院布教師)

一族西信言納少



泉 湛 田 鶴

つた。ところが保元の亂後は、頼長の地位に變つて彼がつき、峻烈な行政手腕を振り出した。

彼は時代の偉才であつて、生れつき天賦の才能に恵まれてゐて、驚くほど多能な手腕家であつた。その才幹は單に學藝的方面だけでなく、實際家としても又大なる天分をもつてゐた。數理に極めた明かで財政に通じてゐたのみか、音樂の方面でも人に劣らぬ教養をもつてゐたし、其他卜占を能くし宋語にも達してゐた程諸事に明るく、實に博學宏才にして諸道の達人であつた。で、惡在府頼長すら彼の教を乞ふてゐた程である。

保元の戰後處理に實に快刀亂麻の手腕を振つて、新院の遠流、爲義忠正を斬り新院方の百名近い公卿武將を捕へて斬らしめ寸情も假借もしなかつた。後白河院

が、彼を登用して政局に當らしめると、天下の大小事を心のままに執行して、或は大内裏の造營、宮延儀禮の復活、政治面の改廢を行ひ、戰後の復興に努力して新制度を作つて短時日に成功を収めたので、保元の亂後、一時嵐の後の澄明な空を眺めることが出來た。

彼は、政治的な權力に大きなあこがれを持ち、絶えず功名榮達

保元の亂の跡始末に快腕を振つて、俄然頭角を現はしたのは、藤原通憲入道信西であつた。

それまでは長い間、彼の存在は認められない程微々たるものであ

念にのみ馳られてゐた野心家であつた。そのためには、いかなる機會をも見逃すまいとした。彼は諸道に達してゐた程、よく學んだ。しかしそれは、その道を深く究めるためでもなし、又、自分の知識欲を満すためでもなかつた。彼にとつては、學藝を身につけるのはただ社會的成功と云ふ魚を得んがための餌にすぎなかつた。後白河の乳母朝子を娶いた事にも、彼の巧名な世才の程が窺はれると評されてゐた。

康治元年廿九才の時、突然薙髮してしまつたが、それも世の常の通世と云つたやうな宗教的な意味ではなかつた。

「危難に逢ふ相がある」と、或る相者に教へられて、驚いてその禍を轉ずるがための出家であつた。だから胸裏に秘められてゐた政治的活動への燃ゆるやうな希望は、その薙髮によつてもやむべきものではなかつた。滿々たる野心を抱いて機會をゐたが、長い間、不遇と寂寥とのうちに送つてやつと少納言の局にすえられたのは、早や六十に近い時であつた。

ところが、遇然保元の亂といふものが、彼をのし上げる運命を開いてくれたのであつた。

信西の妻は待賢門院の侍女として寵愛を受けてゐたのを幸に、妻を通じて禁中に近ずき次第に勢力を張り、特に鳥羽法皇に信賴されて種々進言の功があつた。彼の地位は少納言と云ふ底いものであつたが、實勢は頗る大なるものがあつた。世人もそれをよく知つてゐて彼の力にすがらうとしたものも少くはない。その主なるものは清盛であつた。

信西としても覇をなすためには、武力を必要とすると考へ、清盛に目をかけ初めた。清盛は信西に認められ、清盛も信西に接近した。彼我相互に利するところ多いと考へたのか、いつしか二人は相結ぶようになつてゐた。

以前、義朝から信西に是憲を是非聲にと懇望された時（我が子は學生である。汝が聲に與へる事は出来ない）と、すげなく拒つたのに、清盛の娘を、三男の櫻町中納言成憲に娶つて因縁關係を結ぶに至つた。

信西の勢望と、その子供たちの昇進、ます／＼威を振つて天下の大小事と云はず勝手に振舞ふ權勢ふりに、いたくそねみにくんだのは、外ならぬ右衛門督權中納言信賴であつた。

信賴は、信西を心よりとせぬ義朝に好意をよせ、いつの間にか腹中に入れ、片腕とたのむやうになつた。

保元の亂は、主として源氏の力によつて平定されたのに、戦後の行賞は、平氏は源氏より遙かに多く與へられた形となつてゐた。義朝の右馬頭に對し、清盛は播磨守に任ぜられ、其の後累進して三位迄昇つてゐるのに、義朝は未だ五位に止つてゐる。義朝の胸中甚だおだやかでなかつた。

殊に、義朝が信西の子是憲を聲にと蜀望したところ、劍もほろほろにはねつけたのに、清盛の娘に成憲を配して平氏の外戚となつてからは、義朝の反感を一層昂め、私怨も深く籠つてゐた。

かうした事情から、信賴と義朝は、いよく／＼強く結ばれるに至つた。

信西の行つた亂後の殘黨狩りは、峻烈で執權を極めたもので、叛逆者には極刑を果し、そのためには、嵯峨帝の時、右兵衛督藤原仲成が誅されて以來、三百余年廢止されてゐた死刑さへ復活したのであつた。

彼は、清盛に叔父平忠正を斬らしめ、義朝に父の爲義を斬らしめた。殊に宇治の惡左府の死骸を握起して首實檢したのは、余りな政ごとよ、血もなき冷血漢よと峻しく批難された。彼は、苛烈にまで日頃の政敵や、縁につながる女子供まで斬つた慘虐ぶりに、世人の眉をひそめしめた。この事は多くの敵を作つたことはあらうと云へない。世の批難が隠然と信西に集り、怨みの底流が動めいてゐると考へた信賴は、「信西討つべし」との義憤に燃え初めた。一方、平氏の隆運を坐視するに忍びなかつた義朝の信西に對する日頃積積してゐた不平と憤懣とが終に破れた。かくて、權勢の爭奪が、再び戦火に迫ひやる事となつたのである。

二

平治元年十二月、清盛宿願あつて重盛を伴つて熊野詣での隙を、こんなよき機會は二度と廻つて來ない開運の時ぞとばかり、九日夜子の刻(夜十二時)、野心満々たる信賴は、義朝を大將として、その勢五百余騎を以て院の御所、烏丸の三條殿へ押し寄せ、不逞にも、法皇を他へ遷し奉るのを暴舉を敢てして、門々に火をかけた。

「信西を捕へよ、信西の子らを外へ逃がすな、皆殺しにせよ」と、信賴は兵に呼ばはつた。彼の信西一族への憎惡は一通りでない。

所々から火を擧げた猛火は、空に充ち、煙の中を逃げまどう公卿上人、局の女房達に至るまで、是も信西の一族ではないかと、射伏せ斬り殺した。火に焼けじと出づれば矢に中り、矢に中らじとかへれば火に焼け、井の中に逃げるもの數を知らずと、平治物語に記してゐる程殘虐を極めた。

後白河法皇と寵愛されてゐた俊憲貞憲の二人の信西の子息は、昨夜から院に寢居してゐた。

信西の妻紀井の局は逸早く難れのがれ、貞憲も女房衣を被つて騒ぎと共にうまく脱出したが、長兄の俊憲は逃げおくれってしまった。

「早やこれまで……焼け死なう」と覺悟して北の對の下にもぐり込んでゐたが、敵の隙を伺つて焰の燃えに燃える中を走り出てからうじて逃げ失せる事が出來た。

「信西、ここに居らず」と知ると、丑の刻(午前六時)更に姉小路西洞院の信西の私亭に押し寄せ火を放つた。

女童がわめき泣き叫びながら、素足で裾を亂して逃げ出して來るのを、信西は必ず女姿に身を替へて逃げてゐるに違ひないと、女子供の區別なく斬り伏せてしまつた。

が、信西の姿は、それらの中にも發見されなかつた。

信賴等の舉をあらかじめ探知した信西は、僅かの家人に守られて逸早く洛中を逃亡してゐた。が、大和の田原まで逃げ落ちて來た時峻しい追手の軍に所詮のがれることは出來ないと覺悟を定めると、竹藪の中に穴を掘らして其の中に入り上から土をおほわせて分らぬ

やうにし、節を通した竹を口に當て、呼吸してゐた。

今は廣い地上に寸尺の土地すら身の置くところのない彼であつた。權力に執着し、名譽や榮幸の爭奪にうき身をやつして來た信西の最後にかち得たものは、墓穴にも等しい自分を入れるだけの穴一つであつた。而も野末に穴を掘るすら、人目を恐れねばならなかつた。これが、運命と云ふものの惡戯なのか。これが同じ生涯のうちの出來事であるとは全く信じられない程である。

今やあらゆる望も絶え果てたが、あくまで生に執着した彼は、この危機を脱しやうとあせつてゐた。

やがて追手の伊賀守光保等に尋ね出され首を斬られた上、大路を渡され十二月十七日獄門に梟されてしまつた。

保元の亂後彼が行つた事が、幾程もなく又我が身の上にめぐつて來たのであつた。

信西の首級を得た信賴は、日頃の宿敵を倒して心欣然たるものがあつたらう。

信賴は、かねての望み通り大臣となり右大將を兼ねた上、除目を行つた義朝を四位にして播磨守に任じ、十三才の賴朝を右兵衛佐に補した。

信賴の得意や思ふべしである。彼も亦、間もなく清盛のため義朝と共に亡びてしまつたが。

信西一人の没落は、又その一門眷屬の没落でもあつた。彼が保元の亂後、他に行つた事が、今度はそのまま自分の一族に果せられる事となつた。

この頃の掟として、妻子眷屬は皆同罪に處斷される事となつてゐた。

嫡子新宰相俊憲、次男播磨中將成憲、權右中辨貞憲、美濃少將脩憲、信濃守是憲等は缺官され、その行方を狩り探された。

清盛の女嬪だつた播磨中將、櫻町中納言成憲は、六波羅へ身をおくしてゐたが、直ぐ發覺して召し出された上、坂上兼行に領置かれた。

貞憲は、髪を切つて法師になり河内の蔭に身を頼つてゐたが、彼も宗判官信澄に尋ね出されてしまつた。

直ぐ公卿會議が行はれ、信西の子息等をいかに處罰すべきかが議せられた。

斷罪を主張する公卿等が多かつたが、硬骨漢左大臣伊通の主張が通つて、結局死一等を減じられて遠島と決つた。

その頃の習慣として一夫多妻であつたので信西の子供も多く、或は十二人と云ひ或は男女は六人と稱せられたが、官になつは重んぜられ、僧となつては領德として聞えてゐた。

公卿會議の結果、官にあるものは位記を停められ、僧は度牒を取つて還俗させられた上流刑となつた。

新宰相俊憲は出雲國、播磨中將成憲下野國、右中辨貞憲隱岐國、美濃少將脩憲阿波國、信濃守是憲安房國、法眼淨憲丹波國、法橋寛敏上總國、大法師勝憲安藝國、澄憲信濃國、憲繼陸奥國、覺憲は伊豫國、明遍は越後にと、それ〴〵決定された。

信西系の諸公卿も、或は斷罪となり、或は流刑となつたのは云ふ

までもない。

三

法然上人が四十三才のとき、叡山を下つて東山にささやかな庵をつくり、念佛の旗幟を高く打ち立てられた頃、道友として親しく交り敬愛してゐた遊蓮坊圓照と云ふ若い僧がゐた。

彼こそ、平治の亂後、流刑となつた信濃守是憲の變つた姿であつた。二十一才の若者であつた彼は、一家の悲運によつて出家したこゝとて道へ志す心も堅固で、法華經をそらんじ法華一行三昧に耽つてゐたが、上人から淨土の教を聞いてからは、深く念佛信者となつて一層道に勵んでゐた。

いつも淨土曼陀羅圖を頸にかけて、とどまるところ、休むところ何處でも、この圖をかけて念佛を唱へた。彼は淨土の幻像を胸に畫いて、淨土曼陀羅圖をうつとりとみつめてゐた。そんな時、ともすれば、涙ぐんで物思ひに耽つてゐる容子であつた。が、それは現實の社會に望を失ひうちしほれての涙ではなかつた。如來の大悲を深く思慕する余りのうれし涙であつた。

舎兄の修禪門院の僧正信憲も、

「三寸の火舎に一面の香を盛つて、その香のもえ消えてしまふまで合掌して毎日高聲念佛してゐる」

と、感銘深げに人に語つた程な修道振りであつた。

地獄や餓鬼道と云ふものもこの世の外にあるのではない。現實の社會の中にあると思つた。社會の表裏と云ふものを、まぎ／＼と見

て來た彼であつた。

一見美しさうに見える社會も、一皮はげば醜惡極まるではないかこの時代は、利己心が極度に發達し道義的精神が最も缺けた時代で、人々すべて己が利名のみを求めてゐた。

そのために骨肉互に咬み合ふことさへ、廟堂の貴族の間に頻りに行はれてゐた。

政界は全く頽廢し切つて、自己の地位を守るための保身や、出世のための迎合にのみ心をやつしてゐる公卿朝臣の生活であつた。何の理想もなく、余りな現金な人心と現實主義の世風、世間は暗く人情は醜薄、社會層いたるところうみ切つてゐた。罪惡が蛆のやうに湧いてゐる。權力を得ようと血みどろな斗争が行はれ、物欲をめぐつて醜い紛擾が行はれてゐる。人間の愚かさ、それが人間の性根と云ふものか。

彼は、佛の説き給ふ五濁惡世と云ふ事を痛感せずにはゐられなかつた。

多くの犠牲を拂つて、勝ち得たものも、またたく中に失はれて行くではないか。青春夢多い彼は、現實の社會を眺めて、信濃守として由々しい官吏の一人として、政治的權力と云ふものも、いかにほかないかを體驗して來たのであつた。

父信西を倒して一時權力を勝ち得た信賴義朝の榮華は、いかに短く、末路はいかに非慘であつたか。それを思ふと、胸がいたみ肌もそそけだつ思ひであつた。

彼は、人間いかに生くべきかと、思ひつづけた。

が、醜惡をはなれて清らかにするのであつてはならぬ。いかなるものでも、醜惡の中に、斗争の中に、なぐり合ひの中に、ただ念佛して行ける態度が望ましいと思つた。現實の否定や逃避であつてはならぬ。現實の中に、ほんとの生き方があるのではないか。さう思ふと、彼の心は闇くはなかつた。心は自由な天地に遊んでゐた。この世のあり方に正しく目覺めてゐた圓照であつた。彼の涙は、決して傷心の涙ではなかつた。我も人も共に救はれて行かねばとの利他行に燃えた尊い涙であつた。

上人は口癖として、

「淨土の法門で、圓照とあつたこそ、人界に生を受けた思出である」

と、常に述懐してゐた程、彼の行狀は上人の心を深くとらへ、理想的な信仰態度と目に映つてゐた。

四

信西の末子であつた明遍は、當時無双の碩徳日本三傑の隨一と謳はれてゐた。

文治四年の春、大原談義のとき上人と論議を闘はして深い感銘を受けた彼は、其の後夢に念佛の教こそ時を知り機を量るの教へであるとの啓示を受けて、斷然淨土の教へに歸し、それまでの行をすてひたすら念佛行を修し空阿を名乗るに至つた。

善光寺へ參詣しようと志した明遍は、その前に日頃の不審を解決したいと考へて、小松谷の坊へ上人を訪ねたのであつた。

今天下にその名の鳴り響いてゐる三論の巨匠の訪れを喜んだ上人は、

「おお、明遍來られしかと」と、自ら出迎え宮殿へ請した。

明遍は、座につくなり挨拶も交さない中に、

「未代の罪濁の我等どうしたら生死を離れる事が出来ませうや」と、上人の顔を仰ぐやうに訊いた。

「彌陀の名號を稱へて淨土に往生することが肝要でございます」

「私もさやうと思ひますが、確信を得たいためおたづねいたしました」

と、上人の答へに我が意を得たかのやうに微笑して、

「それにしても、念佛申しても心の散り亂れますのは、一體どうしたらよろしきやら」

念佛唱へながら種々妄想、妄念の起つて來るのを心配して訊いた。

「あなたは昔に聞えた大學匠の事故、篤と考へても御覽せよ。さてもわざとらしい事をされるものよ。心をしづめて妄念を起さないで念佛しようとするのは、生れつきの耳鼻を取り捨てようとするものと同じものよ。それと止めんとするのは無理な仰せかな。源空の力も及びませぬ」

顔をほころばして、耳鼻をとり除くやうな無理をして一體何の利益になるのかと訓された。

折角惠まれてゐる妄念をすててどこに本當の人生があるのか。妄

念があつてこそ、そこに正念が起るのでないか。生れつきのままであるところに、佛道に進む機縁があり向上の一路が生れると説かれる。

上人の一語が、明遍の心根に徹してつきつめた疑を悉く除くことが出来たのか、

「この事を承りたいために参つたのであります」

と、挨拶もそこ〜に、明遍は寶物を得たやうに喜んで辭し去つた。

この容子を眺めてゐた上人の弟子達は、初對面の人が初めから一言の世間の儀禮の詞もなく退出してしまつた明遍の無作法を、上人に詰ると。

「あれこそ、眞の道者の振舞と云ふべきものよ」

と、明遍の眞摯な態度を激賞されたのであつた。

論議に於て日本第一の譽を得てゐた程の明遍も淨土門に歸すると、建久六年五十四才の時、住みなれた山城の光明山をすて去つて高野山にかくれ、蓮花谷に三昧院を創立して出離の道を勵み、念佛を修して高野山に於て大家念佛の濫觴をなしたのであつた。

この頃、重源も念佛の道場を高野山の新別所に設けて、廿四人の結衆と共に不釋念佛を修したが、この二人によつて唱導し初められた念佛の行は、次第に高野一山を風靡して到ところ念佛唱名の聲を聞くに至つた。

この外、信西の死と共に、子息等は各地に放浪してゐたが、出家した者も少くはなかつた。

叡山に入つた澄憲は、明雲座主から祕密の法門悉く受け、その名頗る高く、彼の説法には、龍神も感じて甘露の雨を降らしたと云ふ。

鹿ヶ谷に住んでゐた靜憲法印は、後白河法皇の御信任特に厚く、又清盛にも重く用ひられ、かの後寛等法性寺で密談の席へ、法皇忍んで御幸される筈であつたのを、彼はおいさめ申してお止めしたと云ふ。

勝憲は、醍醐座主であり、東大寺別當をかねてゐた。

覺憲は、興福寺別當として手腕を振ひ、東大寺供養の時、呪願師として晴れの大役を勤めた。

三論に明遍あり法相に貞慶ありと並び稱せられた名聲噴々たる笠置の解脱房貞慶は信西の孫で、貞憲の子であつた。

その他、長門の敏覺・修禪門院の信憲等、信西の子息等は各宗に入つて道を求め、いづれも錚々たる各宗の權威者であり代表者であつた。

上人の新しい念佛のよろこびは圓照・明遍を通じて信西の子息等に次第に知られ、それがやがて各宗にも、念佛の教が流れ込んで行く事になつたのであつた。

施本に

淨土トラクト

B6版
十六頁

竹中信常著

正信へのみちびき

現下新興宗教の功罪を論じ
そのヒロポン的病根を鋭く批
判すると共に、正しい信仰の
あり方を適切に指導する。

藤井實應著

一枚起請文

法然上人の全信仰の結晶た
る一枚起請文をば、懇切に解
説せられてある。

法然上人續仰會編

信徒必携

信者として之だけは心得お
くべきことがらが、教義から
行事作法に到るまで明示され
ている。

定價一部十圓、○十部以上八
圓、送料十部毎八圓増○五
十部以上七圓、送料五十圓
○百部以上送料當方負擔

芝園だより

○四月七日 法然上人の御誕生日
八日 釋尊降誕とつづく、もつと
も、此月は、初旬の花祭も中旬の
御忌會のみが櫻花散る中で修せら
れる。

○今月もやゝ期日に遅れて出来ま
したが、來月から少し元に戻した
と思います。

○本年度の學士院賞を授けられた
中に、東北大學の多田等觀先生が
ある。先生はチベット大藏經等の
選述目錄を完成されたのである。

○三國佛教という言葉は、インド、
シナ、日本という意味で、チベッ
トは入っていない。それほど日本
佛教にはチベット佛教の影響が絶
無であつたし、一部學會の人以外
には余り考えられなかつた。今後
も一般佛教信者に直接思想的な働
きかけという事も縁遠い事かもし
れな。

○しかしながら、インドの聖典の
多くの部分、中には散逸して手に

しない聖典までが、忠實にチベッ
ト語に譯されて残っている。漢譯
だけで、梵本のなくて解讀の困難
なものも、チベット譯によつて解
了できる。一譯よりも二譯、二譯
よりも三譯あつた方が教義が明ら
かになる。特にチベット譯は逐字
的である。

○従つて學問の上から、チベット
經藏は貴重である。所で、何しろ
秘境でもあり、又、國外でも極め
て少數しかなく、研究し、手のつ
けられている部分も僅かである。

○河口慧海、多田等觀兩師は、挺
身決死のチベット行を敢行され、
多大の原典を持ち歸られた。前者
のは東洋文庫に、後者は東北大學
に持たされ、多田師は、大正十二
年日本歸國以來倦むことなく、地
味な、その目錄作成に着手され、
一昨年、全てを完成された。英文
も入つており、世界の學界は、此
方面に於て最初にして最も優れた
キイを得る事となつた。

○十余年前、宇井先生が、之から

の佛教學はチベットをやらなけれ
ばいけませんよと云われていたの
を思い出すが、漸次此方面の研究
が進んで來たのは喜ばしい事であ
る。近頃、人文、地歴の探検隊も
出發しようとしている。

○中共治下、管長である王の下に
我々觀音信仰を主とするチベット
佛教國のある事を注目したい。

○本誌編輯に盡力された安居香山
君は關東の名刹歸隱院に入山、此
程被露があつた。今後の活躍は必
ずや同山關係の期待に應えるであ
ろう。(眞野龍海)

「淨土」四月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和三十年三月廿五日印刷
昭和三十年四月一日發行

(定價三十圓)

編輯兼
發行人 眞野正順

印刷人 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

發行所 法然上人續仰會

東京都千代田區神田保町三ノ十
東京都港區芝公園五ノ一〇
振替東京八二一八七番

特價奉仕

一、寺院用佛具類一式

一、在家用佛壇、佛具一式

多少に拘わらず御用命或は御紹介下さい

東京都江東區深川三好町一ノ五長專院不動寺脇

區役所前

正本堂佛具店

電話深川(64)五八四八

團體宿泊御案内

一、當寺本堂庫裡再建完了しましたので五十名位までの團體宿泊を實費で引受ます。

東京都江東區深川三好町一ノ五區役所前

長專院不動寺

正 本 實 乘

電話深川(64)五八四八

幼稚園 保育園 運動遊具

全國幼稚園・保育園・小學校・各團體に、良品を廉價にのぞ
ットして、堅牢安全な遊具を納入好評を頂いております。松谷
・光明・芝・明照等の淨土宗幼稚園採用。



篠澤鐵工所

東京都大田區堤方町718
電(75)1024(池上驛東3分)

鐵ブランコ2人乗	¥ 12,000
鐵ブランコ3人乗	¥ 14,000
鐵ブランコ4人乗	¥ 22,000
鐵ブランコ6人乗	¥ 26,000
椅子ブランコ4人掛	¥ 13,500
太鼓橋	¥ 10,000
ジャングルジム中型	¥ 28,000
單式滑臺中型	¥ 23,000
復式滑臺中型	¥ 36,500
動物付き遊動木	¥ 30,000

此他各種、一報力タロク送

配達實費(都内横濱500圓以内
其他1000圓以内)組立無料。

小田原・熊谷・土浦以遠は丸通
送り、(荷造費當社・送料着拂)

組立説明書送付